

## 【書評】

## 竹本知行 『大村益次郎—全国を以て一大刀と為す—』 (ミネルヴァ書房、2022年3月)

谷口眞子

【Book Review】 Ōmura Masujirō : zenkoku o motte hitotachi to nasu,  
by Tomoyuki Takemoto, Minerva shobō, 2022, xix+482+7pp., ¥4,500,  
ISBN 9784623093670

Shinko TANIGUCHI

大村益次郎の本格的な伝記、竹本知行『大村益次郎—全国を以て一大刀と為す—』（ミネルヴァ書房、2022年、四六判）が、ミネルヴァ日本評伝選シリーズの一冊として2022年3月に刊行された。著者の竹本知行氏は、同志社大学大学院法学研究科博士後期課程満期退学ののち、政治学で博士学位を取得し、現在、安田女子大学准教授である。単著に『幕末・維新の西洋兵学と近代軍制——大村益次郎とその継承者』<sup>(1)</sup>があり、本書はその知見と『軍事史学』に投稿された数本の論文をもとに、書き下ろされたものである。

大村益次郎は文政8年（1825）に生まれ、明治2年（1869）に45歳で短い生涯を終えた、幕末・維新期の医師、洋学者、軍事官僚である。版籍奉還後、半年ほどで亡くなったこともあり、本格的な伝記は戦前に数冊あるものの、戦後は顧みられてこなかった。その意味で本書は、軍事史的観点から幕末・維新期の日本を考える上でも有益である。最初に大村の生涯を簡単にたどっておこう。

大村は文政8年（1825）5月3日、町医師村田孝益・むめ（梅）の長男として、周防国吉敷郡鑄銭司村字大村（現在の山口県山口市鑄銭司大村）に生まれた。蘭方医梅田幽齋に蘭学、広瀬淡窓の咸宜園で儒学を学んだ。弘化3年（1846）に緒方洪庵の適塾に入り、3年後には塾頭をつとめている。帰郷後の医業はうまくいかなかったようだが、その蘭学知識を買われて、嘉永6年（1853）に宇和島へ行き、翌年からは宇和島藩士として軍艦の雛形建造や蘭書の翻訳・教授にたずさわった。安政3年（1856）、宇和島藩主伊達宗城の参勤交代に従って下向し、江戸で私塾鳩居堂を開設する一方、幕府の講武所に出仕し、蕃書調所出役教授手伝（翌年教授）にもなっている。安政7（万延元）年（1860）には長州藩士となり、文久3年（1863）に長州藩手当防禦事務用掛をつとめ、幕府の洋書調所・講武所を退所している。

元治元年（1864）の四国艦隊下関砲撃事件の際には講和談判に出席し、翌慶応元年（1865）には長州藩の軍制改革を行い、大村益次郎と改姓名した。慶応2年に三兵学科塾の教授役となり、第二次長州征討ではミニエー銃を活用し、石州口軍事参謀を担当した。慶応4年5月の上野戦争で彰義隊を破り、軍務官副知事をつとめ、征討軍の帰国を要求した。明治2年（1869）、戊辰戦争の軍功により永世禄1500石を下賜され、木戸孝允・大久保利通らと新政府の建軍をめぐる論争する。兵部省大輔として「朝廷之兵制永敏愚按」を提出し、京都・大阪を巡回して軍隊創設に奔走するも、9月4日、京都で攘夷派の浪士に襲われて負傷し、11月5日に45歳で死去した。

本書は一般向けのシリーズであるため、史料に現代語訳をつけ、ひらがなを多用するなど、読みやすさに工

(1) 竹本知行『幕末・維新の西洋兵学と近代軍制——大村益次郎とその継承者』（思文閣出版、2014年）。

夫がみられる。戦前に刊行された大村の伝記をはじめ、木戸孝允や大久保利通の日記などさまざまな史料・参考図書を駆使し、45歳の短い生涯を詳述しているため、本文だけでも427頁にわたる。目次は以下の通り。

〈目次〉

はしがき

第1章 一意専心の修学時代

第2章 努力と立身

第3章 江戸での栄達

第4章 長州藩出仕

第5章 長州藩の軍制改革

第6章 四境戦争

第7章 戊辰戦争

第8章 明治建軍

第9章 終焉の地

第10章 益次郎のエートス

参考文献

あとがき

大村益次郎年譜

人名・事項索引

全体の構成は、第二次長州征討（四境戦争）と戊辰戦争の記述が全体の約3分の1、それに明治以降を加えると、大村の41歳～45歳までの5年間で、伝記の半分以上を占めている。ペリー来航など長州藩以外の政治的動向については、紙幅の関係で割愛され、大村益次郎という個人の行動を集中的に叙述した作品となっている。巻末の大村益次郎年譜は内外政治・洋学関係事項に詳しく、大村神社建設、靖国神社の銅像建立、碑文建立などに言及しており、大村死後の顕彰にも考慮していることがわかる<sup>(2)</sup>。

著者は伝記執筆にあたり、はしがきで自身の立場を次のように表明している。

出来事の「すべて」を記録することが不可能である以上、記録史料はもちろん日記でさえもすでに「解釈」の産物であるといえる。つまり、「歴史的事実」とは、当時を物語る行為によって再構成された「解釈学的事実」なのである。それを承知で歴史を物語る行為は、「現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話」なのだろう（はしがき iii 頁）

かつては、一次史料の実証分析によって、歴史的事実・歴史的真実に迫ることができると考えられていた。しかし、そもそもある言語である事柄を認識し、それを書き留めるという行為、そして、それを他者が解釈するという行為自体が、ナラティブの連鎖である。とりわけ伝記の場合、ともすれば著者は当該の人物に自己同一化して語りやすい。それは、その人物の目で当時の物事を理解し、意味づけようとするからである。近年のナラティブ論にも気を配りつつ、物語る行為が意味するところを竹本氏が意識していることを、最初に確認しておきたい。

ただし、大村の晩年期に叙述が集中しており、著者が山口県生まれということもあって、本書は長州藩士としての大村、という視点が濃厚である。それは言葉の使い方にも表れている。

著者は「第二次長州征討」を「四境戦争」と表現している。かつて高校の日本史教科書では、「長州征伐」が使われていたが、現在では「長州征討」「長州戦争」と記されることが多い。近年目立つのは「幕長戦争」

(2) なお、巻末の大村益次郎年譜の嘉永2年4月、慶応元年5月、慶応4年4月の「閏」が脱落しているので、注意されたい。

という表現である。これは、三宅紹宣『日本歴史叢書新装版 69 幕長戦争』<sup>(3)</sup>や『山口県史』などにみられる。本書は第一次長州征討については数ページの記述にとどめ、ほとんどを「四境戦争」（「第二次長州征討」）に費やしている。小倉口、大島口、芸州口、石州口の四つの境で行われた戦いそのもの、とりわけ大村が直接指揮をした石州口の戦いが詳しい。

同様のことは、「馬関戦争」という言葉にも言える。文久3年（1863）5月10日を期して幕府が攘夷決行を命令したため、長州藩は下関海峡を通過する諸外国船を砲撃した。これが「下関事件」である。翌元治元年（1864）8月、英仏米蘭がこれに報復した「四国艦隊下関砲撃事件」が起きた（両年をあわせて「下関戦争」と呼ぶこともある）。著者はこれを「馬関戦争」と表現している。馬関は下関の古称で、ここでも著者は戦いに焦点を当てている。

また、長州藩から派遣されてヨーロッパへ秘密留学した志道聞多（井上馨）、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔（伊藤博文）、野村弥吉（井上勝）の5人を「長州ファイブ」と記している。彼らを乗せた英国船が横浜港から出港したのは文久3年5月12日で、下関事件の2日後であった。萩市・下関市の地元企業や市民の協力により、2006年には『長州ファイブ』という地方創生映画も制作されているとのこと、山口では知られた表現だという。

さて、著者は幕末・維新期の西洋兵学と近代軍制を専門としているので、本書でもゲヴェール銃やミニエー銃などの兵器、歩兵・砲兵・騎兵の三兵編制、オランダの兵書であるクノープの三兵戦術書『活版兵家須知戦闘術門』、私塾鳩居堂・長州藩の博習堂（洋学研究機関の医学所好生館から分離独立した兵学研究機関「西洋学所」の改称名）・三兵学科塾での兵学教育などがわかりやすく説明されている。

長州藩は、幕府による第二次長州征討の可能性が高まる中、新式銃と軍艦を輸入しようとしていた。ゲヴェール銃は、発火装置が雷管のため雨天で使用できたが、発火時の強い衝撃により命中精度は火縄銃とさほど変わらず、横隊による集団戦に向いていた。それと比較して、1847年にフランスの軍人ミニエーが開発したミニエー弾一弾底部が中空の尖頭長円形で、発射ガスの圧力を受けて一定方向に回転しながら発射される一を使った雷管式の前装式ライフル歩兵銃であるミニエー銃は、精確度と有効射程距離に勝っていた。大量のミニエー銃をそろえるのは難しかったため、長州藩はほかの型も購入しているが、このあたりの事情は、兵器の特性をおさえてはじめて理解できる（本書P184～P187。以下、ページ数のみ記す）<sup>(4)</sup>。

軍艦購入については、長州藩が保有する壬戌丸を売却し、それに資金を足してアメリカ商人のドレイクが所有するアメリカ商船モニター号（幕府文書ではフピーハン号）を購入するため、大村が上海に出張したと言われてきたが、大村は売却依頼状に署名しているものの、実際には上海へ行っていないことが指摘されている（P162～P165）。

洋学・兵学教育で使われるテキストの紹介も興味深い。私塾鳩居堂は医学書を主なテキストとし、等級システムを採用している点で、大村が学んだ咸宜園や適塾の影響が強かった（P69～P70）。一方、博習堂では語学以外は訳書主義が採用され、野戦造築術・小戦術・戦闘術・将帥術などを中心にしたカリキュラムが組まれている（P118～P129）。短期間での下士官教育を目指した三兵学科塾では、大村が翻訳したクノープの三兵戦術書『活版兵家須知戦闘術門』が戦術のテキストに使われ、築城術、戦術・小戦法、陸地測量・地理学、戦略・海岸防禦法、万国史が第1級～第5級の教科となっている。三兵学科塾で実施されていた試験問題と答案も紹介されており、当時の兵学教育の一端がうかがえる（P176～P183）。

第二次長州征討では、約10万人の征長軍と約3500人の長州藩が対峙した。小倉口では5隻の軍艦を動員して、積極的な攻勢作戦がとられたが、それ以外の3カ所の戦いでは、当時の長州兵がオーダーミックス（散兵の機動力・横隊の火力・縦隊の衝撃力を複合させた戦術）に対応できる水準まで錬成されていないことから、

(3) 三宅紹宣『日本歴史叢書新装版 69 幕長戦争』（吉川弘文館、2013年）。

(4) 浅川道夫「戊辰戦争期における陸軍の軍備と戦法」奈倉哲三・保谷徹・箱石大編『戊辰戦争の新視点 下 軍事・民衆』（吉川弘文館、2018年）によれば、ミニエー銃はミニエー弾を用いた前装施条銃の総称であり、日本にはイギリス・アメリカ・オランダ・ベルギー・フランス・オーストリアなどの各国で制式化された軍用銃が混在していた。P12。

藩境で専守防禦に徹する大村の作戦（「防禦線防禦点之大略」）が採られた（P207～P210）。大村が直接指揮した石州口の戦いについては、津和野、益田、大麻山・周布村、浜田に分けて、その作戦計画や戦いの様子が詳しく描かれている。

以上のように、本書は西洋兵学と日本の近代軍制に詳しい著者ならではの叙述にあふれているが、軍事的学知という観点からみると、次のような論点があげられよう。

第1に、江戸時代に生きた個人という視点でみると、蘭学の修得は、幕藩体制を越えて師弟関係を結べる自由さ、複数の主人に仕える自由さをもたらしたことが注目される<sup>(5)</sup>。大村は周防の蘭方医梅田幽齋の鹽流亭のほか、豊後の儒者広瀬淡窓の咸宜園、ついで大坂の蘭学者緒方洪庵の適塾に学んでおり、長州藩の支配圏を越えて師弟関係を結んでいる。人の移動という視点からみると、これは師を求めて動いた例である（逆に、師自身が動く例としては、松尾芭蕉が諸国で俳諧を広めたり、和算家が遊歴して和算を広めたりしたことがあげられる）。そして、複数の藩や幕府をまたいだ人の移動は、学術・芸芸という知の伝播をもたらす。事実、大村は宇和島藩、幕府、長州藩に仕えて、蘭学知識やそれにもとづく自己の見識を伝えている。大村が「航海術之書」を翻訳して宇和島藩へ提出したのは、嘉永6年（1853）10月のことで、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーの浦賀来航、ロシア使節プチャーチンの長崎来航から、わずか数ヶ月後のことである。幕府や諸藩の間で、攘夷・開国をめぐる激しい政治的対立が生まれる中、軍事的学知を有した人物の登用や、その移動による知の伝播は、結果的には列強に対峙するためのナショナリズム形成に寄与したということになる。

長州藩は安政6年時点で、宇和島藩のお雇い蘭学者の立場でありながら、幕府の講武所・蕃書調所にも出仕していた大村を、召し抱えようとした。そこで、長州藩主の使者（長州藩江戸留守居役）が江戸の宇和島藩邸へ断りを入れ、それにともない宇和島藩から幕府へ、大村が長州藩士になったことを知らせたという。著者によれば、大村は長州藩への出仕に加えて、「蕃書調所・講武所の勤務も続けており、そこからの給金、私塾鳩居堂の収入、さらには用務を続ける宇和島藩からの手当もあった」（P105）。幕末期における幕府や藩の境界を越えた人材登用は、明治政府が広く幕府や諸藩から人材を集めることにつながっていく。幕末・維新期の人材登用については、政治的観点で語られることが多いが、軍事的学知やその人的ネットワークの観点も必要であることを、本書は示している。

第2に、蘭学との対比でみたときの儒学の意味である。大村は医師の家に生まれ、蘭方医梅田幽齋に入門した。しかし、梅田から儒学・漢学も勉強するよう勧められて、豊後の広瀬淡窓の咸宜園に入門した。著者は、大槻玄沢に学んだ斎藤方策の私塾藍塾でも、蘭医学を学ぶ前に漢学・漢医学を学ばせていたとして、四書五経や歴史書、本草学などの漢医学の課程のあと、『解体新書』などの翻訳医書をテキストにしている例をあげている（P8～P9）。

学問が専門分化する以前の時代、儒学をはじめとする漢語文献は文章規範・一般教養を身につける手段であった。そして、東洋医学は人体を総体的に理解していた。享保改革を推進した8代将軍徳川吉宗は、「普救類方」を編纂・配付させたので、和漢の本草学にもとづくさまざまな病気の治療法や治療薬の知識は、一般社会に流布した。さらに吉宗は「庶物類纂」についても、加賀藩での編纂事業を引き継ぎ、延享4年（1747）に編集が終わっている。「庶物類纂」は3590種の動植物・鉱物などを解説した1000巻を越える本草書で、博物学史上、画期的業績と言われる<sup>(6)</sup>。このような素地があったからこそ、フランス人ショメルが書いた百科事典である『厚生新編』のオランダ語訳を、幕府は文化8年（1811）より蛮書和解御用で翻訳させることができた。『厚生新編』は官庫の秘書とされ、刊行されなかったが、写本が伊達家や島津家などに伝わり、医学教育・蘭学研究などに利用された<sup>(7)</sup>。大村も宇和島藩伊達家で、嘉永7年（1854）にこの翻訳に取り組んでいたという（P57）。

(5) 杉本史子『近世政治空間論 裁き・公・「日本」』（東京大学出版会、2018年）第6章「[画工]と[武士]のあいだ一渡辺華山、身分制社会のなかの公と私」は、三河田原藩の重役で絵師でもあった渡辺華山をとりあげ、重役として主君に仕える「武士」という自己規定から解放される可能性を、「画工」としての技能に見いだしている。

(6) 「庶物類纂」『国史大辞典』。

(7) 「厚生新編」『国史大辞典』。

大村に限らず、当時の蘭学者は上記のような和漢の教養を身につけていたので、砲術をはじめとする兵学知識にも接近できた。シーボルトの鳴滝塾で医学・蘭学を学んだ高野長英は、生理学書を著す一方、蛮社の獄のあと『三兵答古知幾』などを翻訳するほか、宇和島藩主伊達宗城のもとで兵学書の翻訳や軍備の洋式化に従事している。『学問のすゝめ』『文明論之概略』で知られる福澤諭吉にも、『雷銃操法』<sup>(8)</sup>『兵士懐中便覧』『洋兵明鑑』などがある。

なお、日本に流入した蘭書の中には、フランス語・英語・ドイツ語からオランダ語に翻訳されたものもある。幕末維新期の兵式には、蘭式・仏式・英式・独式（プロイセン式）があったとされるが、オランダ語翻訳本の軍事的学知の源がどのあたりにあったのか、学界の今後の検討課題となろう。

第3は、旧征討軍の処理問題と大村による新政府の建軍構想についてである。慶応4年（1868）1月の鳥羽・伏見の戦いから、4月の江戸城無血開城、5月の上野戦争、その後の東北平定を経て、戊辰戦争が終結したのは、明治2年（1869）5月のことであった。我々は後世の目から新政府と呼ぶが、当時はまだ国政の行方は知れず、新政府には財源も軍隊もなかった。論功行賞や木戸孝允による方便としての「征韓論」では、到底諸外国に対峙することはできない。そのような中、大久保利通が征討軍の政府雇用と東下を主張したのに対し、大村は徴兵制を主張した。

明治2年7月、すなわち版籍奉還直後に、大村が三条実美へ提出した「朝廷之兵制永敏愚按」（P367～P369）を読むと、朝廷の直属軍として明治3年から陸兵を徴募し、3年後に常備兵が、5年後には陸海軍の兵学校で養成された士官が誕生して兵制が整うので、常備兵ができるまでの3年間は、十津川兵・浪士隊・旧幕府歩兵の6大隊を調練し、不足分は諸藩から出させて、都府県の警衛にあたらせるとみえる。そして、5年後にできる朝廷の兵制を諸藩が見習い、最終的に皇国の兵制は数年後に統一されるとしている。

つまり、大村は朝廷直属軍として徴兵軍隊を創設し、諸藩が自己の意志により、それにならう形で兵制が統一されると考えている。興味深いことに、大村は廃藩置県を想定していない。さらに、徴募という方法がそれまでの身分制社会を解体する影響力を、あまり考慮していないようである。幕末期に農兵がいたとはいえ、農民や町人が苗字を名乗ることを許されたのは、翌明治3年のことである。また、武士の象徴とされてきた刀について、大礼服着用者および軍人・警察官らの制服着用時以外は、刀剣の携帯を一切禁止する廃刀令が出されたのは、明治9年（1876）3月28日のことであった。二百数十年にわたり、武士が担ってきた軍隊を、身分によらない徴募で編制するのは、当時の日本にとってはきわめて急進的な考え方であった。明治2年の版籍奉還から、翌3年の「藩制」による藩政と家政の財政分離を経て、4年の廃藩置県による行政の集権化と知藩事の東京居住強制という流れの中でみると、大村の案は理想型ではあっても、この時点では実現可能性がきわめて低いものだった。藩主・藩士の家に生まれて代々跡を継いできた大多数の武士が、自己の存在を否定する徴兵制に従うには、価値観の転換が求められた。何より、江戸時代においては、藩主と藩士の主従関係にもとづく家臣団＝軍隊が行政も担っていたので、軍事組織、行政組織、身分制社会をどのようなコンセプトで編成変えし、いかなる関係性のもとに位置づけるか、その全体のパースペクティブの中で、軍隊のあり方を模索する必要があったと思われる。その意味で、建軍論争における大村の主張は、説得力に欠けていたと言わざるを得ないだろう。

第4は、新たな軍隊における天皇や親王の位置について、大村がどのように考えていたのかという点である。大村は慶応4年2月に軍防事務局判事加勢を命じられて朝臣となり、3月には明治天皇の大坂親征に随従、閏4月に江戸に到着し、東征大総督の任にあった有栖川宮熾仁親王に召され、軍務官判事になった。5月の上野戦争で指揮を執り、彰義隊を討伐して、6月には従四位に叙せられている。

(8) 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションでは、『雷銃操法』全3冊がインターネット公開されている。解題によれば、第二次長州征討で幕府軍の旧式の鉄砲が役に立たなかったと聞いた福澤が、書肆からライフルについて書いた洋書を渡され、義弟が江川太郎左衛門の門弟であったことから、鉄砲を持参させ、原書をみながら分解し、また元通りに組み立てさせたという。1冊目は1864年版、2冊目は1867年版をオリジナル・テキストにしており、1冊目は慶応2年12月の初めまでに、2冊目は明治元年夏以降、3冊目は3年の春～夏の出版と考えられている。(https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a03/13)

実は同時期の慶応4年2月から5月にかけて、熾仁親王と同じく仁孝天皇の猶子であった能久親王は、官軍と反対の立場にあった。能久親王は当時、東叡山寛永寺貫主で日光輪王寺の門主でもあり、輪王寺宮公現入道親王以下「公現親王」と記すと称されていた。徳川慶喜は2月12日から寛永寺で謹慎しており、和宮から依頼された公現親王は3月、駿府城内で熾仁親王へ対面し、徳川慶喜赦免を嘆願した。その嘆願は退けられるものの、勝海舟と西郷隆盛の会談などにより江戸城総攻撃は中止され、4月21日に熾仁親王は入城する<sup>(9)</sup>。

一方、公現親王は実父の伏見宮式部卿邦家から天機伺（天皇への御機嫌伺い）をするよう求められた。天機伺のため上京することは事実上、朝廷に忠誠を誓うことを意味しており、寛永寺は江戸市中の領民も含め、公現親王の上京延引を嘆願した<sup>(10)</sup>。こうして5月15日、大村は公現親王を擁した彰義隊に総攻撃を加え、上野戦争で勝利を収めることになるのである。公現親王は品川から海路仙台へと逃れた。そして、軍事の指揮は断るものの、奥羽越列藩同盟の盟主に推戴され、江戸に帰ったのち伏見宮で謹慎させられることになる<sup>(11)</sup>。

上野戦争を指揮した大村が、熾仁親王と公現親王の行動や考え方を知らなかったはずはない。しかし、先にあげた朝廷直属軍の計画には、天皇や皇族が直属軍をどのように指揮するのか、さらに廢藩置県を前提としていない諸藩の指揮を誰が執るのかなどについては、ふれられていない。大村は早い段階で徴兵制を主張したとしてこれまで注目されてきたが、軍隊の命令系統をいかに構築するか、王政復古のもと、天皇や皇族がどのような軍事的地位を占めるべきだと考えていたのかについて、今後の考察が必要となろう。

後日談になるが、戊辰戦争で東征大総督をつとめた有栖川宮熾仁親王（1835～1895）は、明治3年に兵部卿となって海陸軍創設に尽力し、福岡藩知事、元老院議官を経て、10年の西南戦争では鹿児島県逆徒征討総督として戦っている。戦後、陸軍大将、元老院議長になった。18年に左大臣を辞任し、翌19年には参謀本部長をつとめ、22年には参謀総長、日清戦争では陸海全軍の総参謀長であった<sup>(12)</sup>。

また、戊辰戦争当時は輪王寺宮公現入道親王で、奥羽越列藩同盟側について謹慎処分を受けた北白川宮能久親王（1847～1895）は、明治3年12月、軍事研究のためドイツに留学し、プロイセン（プロシア）陸軍大学校で7年学び10年に帰国した。28年に近衛師団長として日清戦争に出征し、戦後は台湾支配の指揮にあたるも、台南で病没し、死後、陸軍大将となった<sup>(13)</sup>。

こうしてみると、かつての武家は行政や警察、あるいは壮兵（志願兵）として鎮台に所属するなど、文武を担う江戸時代の武士の要素を引き継いだ。改暦や官位授与、あるいは有職故実や古典の伝授など、限られた影響力しか持っていなかった天皇・皇族・公家こそ、明治維新でドラスティックな変化を蒙ったのかもしれない。

近年では三谷博が「統治身分の解体は一般には容易にはなしえぬことで、多大な犠牲を伴うはずであるが、維新での政治的死者はおよそ三万人であり、これは先行するフランス革命と比べると、二桁少なかった」<sup>(14)</sup>と述べているように、明治維新が革命的でありながら比較的スムーズに行われた理由の解明が課題となっている。天皇と軍隊という観点では、天皇の統帥権に議論が集中しがちだが、軍事的観点からみると、天皇を支える皇族も検討課題であることを、本書は示唆してくれたと言える。

(9) 奈倉哲三「『上野のお山』をめぐる官軍と江戸市民の攻防」奈倉哲三・保谷徹・箱石大編『戊辰戦争の新視点 下 軍事・民衆』（吉川弘文館、2018年）P131～P132。

(10) 同上、P142。

(11) 「能久親王」『国史大辞典』。

(12) 「熾仁親王」『国史大辞典』。

(13) 「能久親王」『国史大辞典』。

(14) 三谷博『維新史再考 公議・王政から集権・脱身分化へ』（NHK ブックス、2017年）まえがき P3。